

波がしら

泉鏡花作

一

「おかみさん、今晚は、今晚は、」

と鬼川べりの雲の夕暮、侍町の長い土塀の

角なる、小さな荒物屋を、腰障子の外から呼ぶ、

三は袖口まで窺めた凍瘡の手に、悄乎と番傘の濡

れしよびれたのを傾けながら、暗い軒下にいで、

聲をかくる内も寒さに顫へて、小刻に足駄の齒をか

ち／＼／＼、

「遣切れない／＼、おゝ、」と又一ツ體をゆすつ

て、

「一寸、一寸、おかみさん、今晚は、」

時に升形の戸をかつちり、たばね髪、そゝけ鬢の

四十餘の古女房、店で呼ばれても不性を極めて、

急には炬燵から出なかつた。尻の重い癖に、女中の

顔を透かして見ると、口は軽く、

「よう、浮氣者。」

「馬鹿におしな、何時だと思つてるよ、未だ灯も

「點けないぢやないかね。」

「然れば、人間御飯をさへ戴かないで濟むものなら、友白髪まで炬燵から離れたくはないよ、餘り寒いからね、一ツ切燵つて居た處さ、これから、又蕪ちよきノ、だ、寒いねえ。」

「本當に寒いツたらないね、何うしようかと思ふ。」

「而してお前さん何處へ行く。」

「何ね、」

「といつて三は袂をかさこそ、

「提灯に灯を一つ借りようと思つて。あゝお湯へお迎え、奥様が行らした。」

「おともぢやないの。」

「否、大のお身輕で氣取らない方ですから、湯へ行らつしやるのに、おともが附くやうなんぢやありません。迎にも及ばないとおつしやるんだけれど、此の土塀の間が長いのに、寂しいツたらないんだもの、使はれて居るものゝ志です。」

「忠臣々々、然うしておあげなさい、悪くは報はない。」

「何も徳を取らうといふ譯ぢやあないんだけれど、

あの通りの御容色好しだから、途中でまた間違でも
あるとならないからね。」

女房は件の升形の戸に、指の尖だけ掴つたのが見
える、煤けた顔で打 頷き、

「暫くの間だけれども、此處んところが恐しく難
所だよ。お前さん處の奥様が、あの御様子で、湯上
りか何かで、お前、人通のない處をお歩行でさ、悪
く生酔にでもおつかまんなすつて御覽金時計を、ぶ
ら提げて、掏摸にぶツつかるやうなものさ、危険至
極さ。それに甚麽にお心 懸が高等でも、一度褻を
お取んなすつた弱身だよ、からかはうといふ奴に出
つくはしちや、先方が氣の強いから恐しいやね、其
處は馬の骨にでもアイお一杯で、悲しいことにひけ
目がおあんなさるといふものさ。でもまあ、旦那様
が軍人で被在しやるから、其の御威光が、あるにや
ああるといふもんだ。」

「其ね、旦那様は御留守なの。」

「お留守だつて。」

「つい此間御役所の御用で、名古屋の方へ御 出
張なすつたんです。」

「然う、そんなら此のまあ寒いのに、尻つ切炬燵

へ入つて樂寢をなすつて被在つしやりや可いものを、
其處は矢張それ者だね。」

と女房は染々いつて、懽然たるものあるが如し。
三は傾けて居た番傘をうしろ廻にして、軒を漏る
雫を厭ひながら尚ほ窓口に差寄つて、

「大違ひ、唯そればかりぢやあ、飛んだおめかし
のやうに聞えるが、榮耀の餅の皮とやらで、此の降
るのに、それも三日入らない人ぢやあなし、びしよ
／＼湯に行くには當らないつた勘定になるけれども、
其處がね、本當においとしい處なの。」

「ふう。」

「先に勤をなすつておいでの時分、何うにかして
堅氣になつたら、演劇だの、遊山だの、いや奥様、
御新造と、奉られて見たいのと、そんな望
は些ともない。唯こんな晩にやあ、櫛巻にしてざん
ぶり一風呂入つて、一人で八疊敷の眞中へ寝て見た
かつたんですとさ。」

「ふむ。」といつて女房は、大きに思ふ所あるらしかつたが、はたと合點し、

「客 商賣は骨か折れるね。何うして、並大抵、傍で見るとやうなものぢやあないんだよ。——こんな晩にやあ湯に入つて、八疊敷で一人寐て見たい——なるほど奥様は苦勞をなすつた。あゝ又御奉公をなさる、お前さんも御苦勞なり、荒物屋に添つて居る、媽々殿も御苦勞なり。」

「其處らもくらうなりよしたわ、ほゝゝほゝ。」

「大きにさ、」

三は急に又 慌しく、足駄の齒を土間に鳴して、

「笑ひごつちやあない、おゝ寒い。」

と袖口に絡めながら鎖を引出したぶら提灯、かじかんだ不精から氣味の悪いものゝやうに、端を撮んで提げて見せ、

「疾く點けて下さいな。」

「一寸まあ、此方へお入り。」と窓から顔を引込ませて、腰障子をかたりと開けると、吹入る風に染込む冷氣。

ふたり
二人とも胴 顫して、

「おゝ！」

「耐らない、此のさき二町ばかりは、田圃から吹曝でお察し申すよ。」

三は 傘 を土間にばさりと置いて、夜目には鮮かな霰の中の一筋路を、鬼川の流るゝ瀬の行く方にずつと見遣り、

「若いもんです、寒さの方はそんなに驚きはしなけれど、此の長土堀には 獺 が出るつて謂ふからね、驚いちまふ。つい二日ばかり前にも、内へ来る定どんが驚かされたつていふんですよ。否、眞個ですとさ、小僧に化けるつていふぢやありませんか。」と傘を一つくるりと廻して腰障子を屈んで覗く。

と、ちよろ／＼と附木が燃えて、ひらめいて二ツに分れ、眞暗な中へ提灯が一ツ出る、中仕切の障子が寒さうに顯れて、やがて板の間の黒い上、五寸ばかりの處をふらりと来る、女 房の姿は茫然して、鎖を下げた 掌 が窪んで眞赤。

片手をだらりと提灯の上へ陰に提げて、咽を長くすると、目を白くした。

「三や　ー。　」

「あれ。」

「怨めしい。ふん、馬丁に情人がある癖に、何だ、然う怯氣々々して人魂と間違へちや可けないよ。」
と渡す。

「いけふざけた、串戯だつて、おゝ厭だ、本當ですよ。未だ暮れ切つたといふんぢやあないから、湯屋で點けて歸らうと思つた、其さへ此方や我慢が出来ないで寄つたんだものを、」と大眞面目。

「おや、感心に　獺　が恐い？」

あゝ、悴があらば嫁にする。」

「人、可い氣だねえ。」

「何、小僧にも幽霊にも化けはしない、奥様になるから氣をつけておいで。」

「唯、其の氣で参じませう。」と苦笑、提灯の鎖を乳のあたりへぶら／＼と釣つて持ち、足駄を引ずるやうにして軒を出しな、引かけた番傘が、逆にかへつて、柄が耳より上になり、三は胸を反して、はツと支へる機、川邊の方へ弓形によるけて、くりと行手に背を向け、後退をする形で二足三足。

「おゝ、風立つた。」と高調子、女房が聲をかけ

たのにも、三は向風に呼吸を飲んで、むうとも言はず、旋てギツクリ、差す方に向直つて、傘を眞圓に備へて、一文字。一陣颯と荒れた迄、又降りきるばかりなり。

未だ暮れも果てないのに、荒物屋は腰障子を下さばかり、之れに限らず、閉籠勝の越路の冬、最も場末の侍町、長土堀二町ばかりの間は、獺のはれ男の浮名に立つて、宵月の夏さへ人通は稀である。

況して、霜月の半頃から夜半に一しきり、黄昏に一しきり、片割月に、入日影に、漆のやうな雲がかゝると、塀の中で狐が鳴く。

其の雲が時雨れ／＼て、終日夜すがら降續くこと
 二日三日、山蔭に小さな青い月の影を見る暁方、ば
 ら／＼と初霰、さて世が變つたやうに晴上つて、
 晝になると、寒さが身に染みて、市中五萬軒、後馳
 の分も、やゝ冬構なし果つる。

旋てとことのはの闇となり、雲は墨の上へ漆を重ね、
 月も星も包み果てゝ、時々 風が荒立つても其の一
 片の動くとも見えず。

恚て天に雪 催が調ふと、矢玉の音絶ゆる時なく、
 丑、寅、辰、巳、刻々に修羅轆を打掛けて、霰々、
 又玉 霰。

其のけたゝましさ、凄じさも、北海を揺ぶる風の、
 海鳴のおどろ／＼しいのと一所に、耳について、板
 屋打つ音にも、窓を破る響にも、敢て耳を傾けず、
 目を敬てぬ頃を期して、正午の寒威良緩むと思ふと、
 例年の如く哄と雨、凡そ半時ばかりの間に、五度六
 度といふもの、恰も盆を傾くるが如き大雨になつて、
 頃刻止んだ、と思ふと、此日も晩方から、霰 交り
 になつたのであつた。

越こしの冬ふゆに恁かばかりのものはあるまい。霜しもはよし、
霰あられはよし、雪ゆきはよし、凍いてさへ防ふせぐにがある。霰みぞれは凡およ
そ世よにあらゆる寒さむさ、冷つめたたさの、水みづに會あへば流ながれに交まじ
り、火ひに會あへば霰しゅくとなり、風かぜに會あへば、白筋しらすぢを立た
て、さつと樹立こたちに注そぎ、ひるがへ 翻ひるがへつて雪ゆきとなるので
ある。

或あるひはびしや／＼と石いしを嘗なめ、或あるひは畦土あぜつちの大根だいこんの葉は
に形かたちを留とめ、瀬せを早はやめ行ゆく泡あわに化くわし、袖そでに觸ふるれば
絲いとをなして、恰あたかも飴あめの纏まとふやう、拂はらへども落おちず、
打うても響ひびかず、絞しぼれども敢あて霰しゅくを切きらぬ。

然されば傘からかさには柄えもりして、つる／＼、辻すへるの
を、忘わすれるばかり確乎しつかりと取とつて、三さんは川かはべりの霰みぞれの
暗路やみち。長上塀ながとべいの半なかばを辿たどる。

左手ゆんでは鬼川おにがはを隔へだて、遙はるかに目貫めぬきの町まちの、裏手うらてに並なら
ぶ藏くらを望のぞむまで、三十年ねんらいしよくさん來き 殖は産工業さんこうげふの道みちの開ひらけ
ざる市まちは衰おとろへて、次第しだいに畠はたけとなつた一面めんの大根だいこん畑はたけ
の中に、非人小屋ひにんこが二ふたつ三みつ見みゆるのみ、犬いぬも吠ほえ
ず、川かはは唯幅五間たははに過すぎないのであるけれども、晝ひる
頃ころの大雨たいうに濁流渦たくりうを卷まいて溢あふるゝばかり、中流波ちゅうりうなみを
蜿うねらし、土塀際どへいぎはの細道ほそみちは 處ところ々／＼弓形ゆみなりに切きれ込こんで、
静しづかにゆつたりとして寄らせつ返かへしつするものが、沈しづんだ

色で光るやうに、目を遮つて、今にも脛を浸すかと、
三は足許も定かならず、

傍に狐が棲むといふ堀の内の屋敷跡は、陰々滅々
として雲が落着くのも手に取るやう、彼は人一人に
出逢はなかつた。勿論今朝から片手で數へる位は通
つたものゝ、北よりも、南よりも、行逢つたのはな
かつたのである。

「おや。」

「……」

「三かい。あゝ、然うだつた。」

「奥様！」と一生懸命、聲に縊つて、眞俯何
に前途を急いだ、顔とともに提灯を上げると、崩
れた土堀に茫乎と女の影。

「奥様。」と些と甲走つて、提灯を環形に一振、
振り返るとすれ違つて、主は背後に立つて居た。爪皮
の浅いのに、甲のふツくりした素足、絲織の半纏、
繻子の帯、小袖にも繻子の襟、眞黒な艶に映つて、
項から頬の色の白さ。透通るやうな耳許へ、斜に黄
楊の鬢櫛、是が望といつた束ね髪で、提灯のあかり
に湯上りの目許ほんのりと、蛇の目の傘の中で、振
向いて身を捻つて、

「だらうと思つたよ、御苦勞ね、寒いのに。」

「奥様々々、私はこの。」と、呼吸を切つて未だ

せい／＼、横幅の廣いのが、すらりとした立姿と、

傘の、黒と鼠を組交ぜに、ざ、ざ、ざ、ざ、ざ、

ざと霏れる中で、擦寄つて身を揺り、

「もう／＼もう、お念佛三昧でございました。」

から

四

「然う、私も此の提灯が便だつたよ。」と爽かに言つたが、三の傘から霽して、ヒヤリとかつた足の甲を、踵の見ゆるまで、うしろざまに擡げて蹴出しの裾の夜目にも媚かしいのを搦めながら、左の足の小うらにあてゝ、拭つて足駄を穿直して、其まゝ。

「急いで歸らうね。」

「あれ、奥様、お提灯はさきへ参りますものでございます。」

「長い丁場に灯は唯た一ツ切だねえ、もうね、お湯を出ると酒屋の前あたりから眞直に是が見えたよ。」と丁と蛇の目を振りかたげ、舊來た方を振り向いて一寸イむ。

「あなた。」

「あい。」

「こんな晩に背後を振り向いて御覽なさるものぢやございませんよ。」

「何故え。」

「魔がさすものだと申します。」

「然うかい、三が嘘ばかり。」

「否、眞個でございますよ、唯最うまつとう向うを、一心に念じて、目を瞑つて歩行く心持で居さいすれば、何事もないさうでございます。」

「厭だよ、そんなに歩いて歩いて川へなんぞ落ちやあ。あら大變に水が出たこと、御覽、海のやうぢやないか、路が傾いで溢れて來さうだよ、ずつと此方へ寄つてお歩きよ。」

と横に身を開いて土塀の際。

「奥様、狐が居りますよ、あなた。」

「こん／＼様、お稻荷様ぢやないか。」

と石垣に裳を觸れさうに、すく／＼すく／＼と見え隠れに影を描いて通つたが、一際明るく、濡土の壁の崩に、其の姿の映つた時、偶然目に留るものがあつた。

「まあ、大きな相合傘を描いたこと、一寸お待ち、お前一寸其の灯をお見せな。」

「何うなさいますのでございます。」

「誰も居ないから見てやらう、いろ／＼／＼／＼なんだよ。」

「お止し遊ばせ、あなたお湯醒で風邪を引きますよ。」と止むことを得ず立停つたが、大きに縮む。

「然う／＼、私はばか／＼するのに、冷いのがひや／＼して、此頃にならない體 中のあかゞ抜けたやうで、すつきりして、他愛なく可い心 持だけれども、お前は寒からう、行きがけにやあ私も骨が硬ばるかと思つたもの。可いやね、堪忍おし、見かけて見ないと今夜魘される、一寸お手敷。其のかはり内へ歸るとお前を炬燵に暖らして、搔卷を着せて暖めて遣つてさ、私が衣服を脱いで板の間に坐つて顫へてあげるから。」

何んなに心地が清々しいか、何事も思はぬ状で、二十四と云ふ人が、道草の惡足搔。

「何の他愛のないことをおつしやるやら。」と餘のことに三も笑ひながら、すつと寄つて、土堀に提灯をさしつけた、影は消えて、前後十町人なき處、灯を包んだ 後 姿、はつきりと二ツ立つたり。

「何、おせき。」と讀みかけて、ためて見て、差覗き、

「丁寧に釘か何かで刻んで描いたよ、おせきが、厭だ、同一名だよ。」

「あら、彼處はそれぢやあ、旦那様のお名前でございますか。」

「串戲をお言ひな、小兒同志のいたづらだよ。」
「といひ消したが、ものずきは猶止まず、同一名の相合傘、男の名を見ようとすると、僅の間も降りしきつて、面に、壁に、霏がさら／＼、お關はもどかしさうに、手に持った白地の濡手拭をひらりとほくしてひら／＼と、土塀に對して雫を拂つた。」

「おゝ、三枝。」

三枝と一聲高く讀んで、銀杏齒の足駄をざつくと一足、あとへ退つて、じつと瞳を定めたのである。

「もういいのでございますか。」と呼んで見ても返事がなし。お關は黒目勝な目をばつちりと、傍目も觸らず、土塀を賸めてイんだが、忘れたやうに提げて居た手拭の端を引上げ、傘の柄を片類にあて、差俯向いて、一寸背向、■に濡れたる目を拭ひ、

「何のこつた、詰らないものを、おゝ寒くなつた。」と肩のあたりのぞく／＼する状、するりと濡子の襟を引合せる、又一時哄と風。

川波の逆立つばかり、北から南に吹荒ぶと、土に溜つた水も蜿つて、裳も袖も斜にはら／＼、ぴしゃりと傘を向う状にすばめると、袖口を巻きあげて、腕白く、両手に確乎と柄を掴んで、

「しどいよ。」といふと又一ゆれ、半纏の背は波をはらんで、鬢を殺ぐやうに黒髪も颯と靡く。

三の體は一ツ廻つて、番傘は一問引裂かれた、提灯は一ひしぎ、重石でひしやがれたやうに礎と消える。

「ほう。」といつて立疎む、三の袂を横合から無

手と捕へて、ぴたりと附着いた、濡鼠の一寸法師。

「むゝ。」といひざま腰に縫った毯栗天窓の猿眼、きよろりとするのを一目見るや、ぎやツとも言はず、其の取着かれた腰を抜かして、水ツ溜へ貫目のある肥った臀をどつさり尻餅。

途端に小男は黒犬が立つたやうに、ひよこ／＼と飛離れたが、突然、なよ／＼と風に堪へたるお關の腰に縫着いた。

と殆ど同時に、起きも上らず、肩を揺つて、腹に大波を打たせて、難産といふ體で居た三は、ぬツくと突立つて、

「河童だツ」と喚くと齊しく、弾丸が外れたやうに、湯屋の方へ雲を亂して一目散。

お關も取着かれた體は鳩尾のあたりから消えて失せさうな、冷いものに引抱かれて、舌を釣つて呼吸を引いたが、わな／＼と顫へながら、

「あゝれさ、何をおしだねえ。」と見る間に細りと痩せて、身を疎めた。

「叔母さん、寒いよう。」

「まあ。」

「寒いやあ、寒いやあ。」と顫へ／＼我を忘れて泣いて居るは、お關が乳の邊までよりない脊たけの九ツばかりの男の兒、あはれ小雀の霜に凍てた、いたいけな手の赤らんだので、覺えのないまで、半纏の褌を引摺み、腋あけの下の肌のぬくみに、ひつたり顔を押當てた。筒袖の布子一枚、襷褌の見える襯衣を着たが、尻端折で、跣足、笠も持たず、唯取着かれたばかりでもお關が小袖二枚を透して膚まで通りさうにぶ濡である。と先づ見て落着く端に、心優しい婦人なれば、怪しかる者を振りも放さず、傘前に差傾け、手拭を持った手を、上から背に載せてそつと叩いて、

「兄さん、何うしたよ。」

「寒くつて歸られねえや、叔母さん連れてつてお

くんな。」

「家は何處。」

「彼處！ 彼處！」と言つて掴まつたまゝ、小僧は身悶して、

「荒物屋の角から曲つて、ずっと行くんだ、ずっと行く穴水 田圃の入口だ。」

お關は然も親身に頷き、

「あゝ可うござんすとも、連れて行つて上げませう、何て家なの。」

「三枝。」

「え。」

「三枝だよ。」

「三枝です！」小僧の背を抱いた手に、確乎と力が入つた、少し屈むやうにして、

「名は。」

「菊次だ。」

「而して、而して。」とお關は息をはずませながら、

「何は、お父さんのお名、ちやあない、あゝ、お父さんはない、ぢやあ兄さんの名は。」

「菊藏てんだ。」

六

お關は四邊を二した、今の一荒で持つて来たか、
降るものゝ白さが増した。土塀にざら／＼と當る音。
「さあ、何しろまあ、此方へ附着いておくれ、生
憎肩掛も何も着て来ない、お前さん傘は何うしたの
さ。」

「川へ流れつちやつたの。」
「あらしに取られたんだね。」

「お前、まあ何より跣足で冷たからう。可哀さう
に、お待ちよ、今此の足駄を脱いで上げるから。」
と、ずいと引上げる下前の勝色裏。

「入らねえ、そんなものあ入らねえ、轉んじまあ、
駄目なこつた、跣足は馴れてら、足は冷たかないん
だよ。」

「然うかい、可いかい、叔母さんは大人だから大
丈夫だものを。」

「寒くつて為様がねえ。」

「何しろ、困つたね、成たけ、さあ恚うやつて、
袂をかけて、」

菊次はお關の半纏の中へすつぼりと左右から襟を合せて、顔だけ顯して、目をくる／＼とやつて呼吸を吐いた。

「歩行けるか知ら、」

「最う歩行けら。歩行くな譯や無えや、叔母さん

又あんな風が吹いたら確乎つかまらしてくんねえ。

私、川の中へ捲込まれさうだつたから、つかまつた

んだ、頼むぜ。」

「あいよ、大丈夫だよ、私が死ねばつたつて、お

前に怪我はさせないよ、安心おし。」

「あゝ、酷かつた、酒も何も打ちまけツちやつた、

ビールの瓶も形なしだ。」

「お酒を買つて來たの、水溜だ、氣をおつけ。」

「うむ。」

「此のさきの酒屋で、然う、ぢやあ叔母さんも今

湯から歸つて來たんだよ、同一路だから彼處で逢ひ

さうなものだつたねえ。」

「先刻叔母さん湯へ行つた時、私も行つたの、そ

れから魚市へ行つて、鹽鰯を一ツ片買った、其も

獺に捕られツちやつた、何にもねえや。」

「飛んだことをおしだねえ、何なの、菊さん、あ

の兄さんがお酒を飲むの。」

「あゝ、飲むけれど買へねえんだ、今日は鞆様のお祭だから、お神酒に些とばかり買ひに行つた、酒屋の番頭め、出ないよツて言やがつた、それから癩に障つて喧嘩をした、えゝ！ やツつきたい。それだから歸る時又叔母さんと一所になつたの、びちよ／＼歩行いて来たけれど、暗いから解らなかつたんだぜ、え、叔母さん。」

とぶら下るやうにして、圓い顔を仰向けて言ふのを、じつと見ながら、お關は染々。

「そんなら早くから一所にすれば可かつたもの、何故、そつと歩行いてました。」と情餘つて窘めるが如くに言ふ。

「だつて、可けねえや、私、汚えから、叔母さん厭がるだらうと思つたの、」

「えゝ！ まあ、お前。」と言切に、お關は少し涙ぐみ、思はず歩を留めたが、

「一寸誰がそんな智慧をつけました、兄さん、」

「否。」

「そんなら可いけれどね、お前、そんな氣を出すものぢやあないよ、困つた時だの、切ないことのある

る時には、屹度人に相談をするものだよ。ね、兄さんにも然うお言ひ。自分ぢやあ何も知らないけれど、姉さんはもう本當の姉さんのやうに思ふよ。今ね、路でね、私の家を教へるからね、欲しいものがあつたら、然ういつておいで。お待ちよ、兄さんに言つちやあ悪いよ、そして今夜お酒も鹽鱒とかも失くして了つて、叱られやしないか。」

「何叱りやしないや。夜も抱いて寝てくれるもの、だつて何だなあ、あとで御神酒を頂くツて言つてたつけ、可哀さうだ、叔母さん、ほんたうに何かくれるんなら、酒え些とばかり買つてやつておくれ、躍らあ。」

「泣かしちや厭。ほんとに兄さん思だよ。」とくびれるばかり小さな手首を確乎と取つたが、

「氷のやうだ。」と内懐へ。身に染みたか、肩をすばめ、蛇の目を斜に翳して、

「あの、菊さんは未だ、女房さんは持つまいねえ。」

「酒も、然うか、鹽鱒も、むう、然うか、可いや、仕方がねえ。俺もそんなこつたらうと思つたい、未だまあ、手前が怪我をしなかつたが目ツけものだ。

何うしてお神酒を備へて、お祭所かい、やい菊、俺つひぞ弱い音を吹いたことはねえが、最う耐らねえ、犬の子一疋だつて話、對手はなし、年紀も行かねえ、手前を捕へて愚痴を言つたつてはじまらず、俺あ何も言はねえが、餘のこつた、手前ひつしよりで寒からうけれど、まあ、一寸見てくんねえ。」

と細工盤を背後に、鐵寐を控へながら、敷居の上へ小洋燈の油煙に燻ぼつた、赤黒い灯を置いて、薄汚れたどんつくに細帯を前でしめ、首筋の綻びたちやん／＼を着て、糞れ果てた壮佼、腕組をして悄然と瞞める背後から、弟の菊次は毬栗頭の、糞の雫も未だ乾かぬ、霜げて赤らんだ圓顔を出して差覗く。

敷居を三寸餘すまで、充滿の水、疊一疊數ばかりの土間を、だぶ／＼と浸して居る。

「何うだ菊、まさかと思つたが、過日からの雨で

「頭これだ、障子の外は田圃一面宛然湖よ。」と深い溜息。

土間を仕切つた、小窓の雨戸は、疾く嵐に取られて、露出しの破障子二枚、下が羽目になつて、外は空地の一軒家。特に此の裏口は、田圃續で一段地盤が低いために、彼の鬼川の田に引いた用水の、直ぐ間近なのが溢れたのである。

「先刻な、手前を便に出した後で、見ねえ如彼やつて、鞆の神様をかけてよ。」

土間の片隅に鞆を置いて、こゝに爐を切り、下ならしの細工場にした、正面の壁には、一幅の畫像の、古色燦爛たる中に、白衣を纏ひ、黒髪長く、金、銀、紺朱の瓔珞をかけて、波の上にイみ給ふ、御手に一挺の鐵槌を取つた、端麗、微妙の御姿、髣髴として見え給ふ。

其の描いた波と、溢れ浸した水との間に、古びたが一脚の白木の臺。

「お前が歸つたら御神酒を供へよう、それまでに一ツ仕事の口をつけて置かうと、酷工面の彼の銅板を燻すによ、なけなしの炭火を起して、幾月にもない赫と威勢よく遣つたと思へ！」

根太の朽ちた處から壁を潜つてちよろ／＼と山形に舌を出さあ、引いたり、出たりしてる内に、段々幅が廣くなつて、はじめは拳で引拂つたのが、いや藁だの、繩だの、洗ひざらひ持ち出したが、役に立たねえ。敷いて居た、莫塵までぶく／＼と浮き上らあ、爐の火は黒い泡を吹くな、見ねえ、「といふ、灰汁色をした水の上に泡立つて、炭はごろ／＼と浮いて動く。

「然も鞆祭の晩だ。噫、菊、堪忍しねえ、手前にもお下げを頂かして鹽鯽を食はして遣らうと思つたが、其も是も運勢よ、何たる見限られたこつた喃、菊藏ともいつてくれるものあねえ。」と弟を背に掴まらせて、盤石に押さるゝやう、力も絶げに垂れて居た、顔を上げて、振向いて、

「今な、蒲團を暖める算段をして遣るから、手前、素裸になつて潜つて先へ寝ねえ、よ、然うづぶ濡ぢやあ體が堪らない、煩ふな、菊、あとで俺が何うともすら…・あとで俺は何うともすら、「と思入つた目に涙 充滿、餓に迫つても、渴ゑても恚う氣の弱かつた験はつひにない、菊藏も今は早や支へ兼ね

た風情である。

其ともなく因果を含められた菊次は、聲を揚げて
も泣くべきに、奴、些ともめげたる體なく、
「何だ、泣くなんて何だ、お前、大きい兄さんの
癖に見つともないや。あるよ、丁とあるよ、構つて
くれる人があるんだぜ。今度酒を買つて遣ら、何だ
泣くなんて、弱蟲ぢやあないか、姉さんが見て笑つ
てるぜ。」

「何を。」

「泣いちゃあ姉さんが笑はあな。」

菊藏は不審の面色で、

「姉さんツて何だ。」

「餘所の叔母さんだい、整然と今夜姉さんになつたんだよ。長上塀の所で、この、風に吹き飛ばされさうになつたから掴まつて助けて貰ふとね、可愛がつて、半纏の中へ入れて内まで連れて来てくれたい。門ん處も水がついてら、膝まであるぜ。兄さんは何處に居るツて聞くから、裏の鞆の處だ、細工場に坐つてるツたら、跣足になつて密と溢れる水ん中を渡つて裏口へ廻つたんだ。言つちやあ不可いツていひつけられたんだけれど、泣いて見つともないや、見て居るんだぜ。」

「え、野郎、早く言へ。送つて来て下すつたのか、馬鹿だな、お禮も何にも申しやあしねえ。」

と突然菊藏は片膝立てたが、土間は水。

間近だからずいと立つたまゝ、片手を鴨居に掴まると、天井の煤がばツさり、凄じい鼠の音、其まゝ身體を橋にして向うざまに右手で障子を一枚、紙が

めら／＼と破れて、かつたり引開けると裏は歇んで、
戸外は薄月。

つら／＼とある水の中に、束ね髪の其の姿、ひら
りと身を交したが、屹と見て、

「呀！」

「菊さん。」

「お關か。」とばツたり閉めて、どツかと坐した。

「何うするんだ、何うするんだい。」と弟は

おろ／＼聲。

其處を流るゝ用水の出水に連る響に紛れて、人の
氣勢もしなかつた、お關は我を憚る身の、頑是ない
ものに打明けられて、退くにも退かれずはら／＼と
する間に、ひたと菊藏に知られたのである。

障子の外には忍泣、菊藏は色を變へて唇を
震はして、暫くはものも言はなかつたが、一聲鋭く、
「お關さん、お前、お前何にも言つちやあ可けね
え、俺も何にも言やしねえ。」

「あいよ。」

「お前、只た一人の目の見えねえ父爺に、苦勞を
懸けちやあならねえぞ。」

こゝかしこ 銀の色を蛇らして、渺として一個小湖の景、風も凪ぎ、あめも歇み、夜色沈々として、唯凄じきは二間を措かず、矢を射る用水の響である。

お關は歔歔欽を白齒で噛み留め、面の色を正して、判然と天の一方にかゝる愛宕の頂を打望み、丁と額に手を翳すと、身を縮めて、一心に拝み伏した。

時に小川の浪逆立ち、下流の方より逆に、長さ三丈一條の、白布を蛇らして、忽然として波がしら。

最物凄き月影に、黒頭 長身のものこそありけれ、かゝる夜にはまゝある習の、獺 にや追はれけむ、

二尺ばかりの一尾の鮭。

彼の波がしら縦横に、巴を描き、渦を巻いて、川立騒ぎ、水亂れて、衝と躍つて、お關が間近を、二を投げて横截つたが、弓形に翻然と跳ね、ぱつと鞆場の障子を脱した、大の魚は、勢 餘つて鱗を返すと、鞆の御神の畫像の前なる白木の臺に横はんぬ。

「あれ。」とばかりに思はず知らず、縋り寄つて取着く敷居。

「菊さん、縁起ですよ、嬉しいねえ。」

「やあ。」と突立つて、菊藏は、大手を廣げたが、
牲の動かむともせざるを見て、眉を開いて見返した、
氣高**い**ばかりの女の顔。

「お關、喜びねえ。」と高胡坐、手を引込めると
懷から片膚をずばと脱ぎ、

「菊、しつかりしろい、まんは直つた。」といひ
ざまに、術で鍛へた腕の牙、鐵槌をぐいと取つて、
目よりも高く差上げた。

【完】